

上尾市宝蔵寺の ラカンマキの移植



増島 成郎
(埼玉県環境部自然保護課長)

はじめに

埼玉県上尾市原市の真言宗宝蔵寺境内の市指定天然記物“ラカンマキ”が、東北・上越新幹線ルートにかかるため、昭和56年7月4日から6日にかけて移植された。

本堂などは、既に昭和56年3月に取り壊され、100m離れた地点に、昭和57年6月に完成の予定となっているが、このラカンマキは、林伸明住職をはじめ地元の人達多数の要望により、移植して保護することになったものである。

ラカンマキの由来等

このラカンマキは途中から二つの幹に分かれており、一方の幹は半ばから欠けてはいるものの、ラカンマキの特性を発揮して、全体の樹形は美しい姿を呈している。高さ約10m、幹回り2.5mで、推定樹齢500~600年とされており、昭和42年5月1日付けで、市の天然記念物に指定されている。

樹高5m程度のラカンマキが多い中で、このラカンマキは、県内屈指の大木であり、宝蔵寺の歴

史ともあいまって、当市周辺では、由緒ある名木として広く知られている。

ラカンマキは、中国の原産で、わが国では、九州の南部や南西諸島に自生するマキ科の常緑高木である。枝が多く、葉は厚く密生しており、その長さは5~8cmぐらいで、雌雄は、その株を異にしている。5月頃に花を開き、秋に実るが、種子は楕円形で青緑色をし、その基部には紅色の皮がついており、その形が羅漢の姿に似ているところから、ラカンマキと呼ばれている由である。

暖かい地方に自生し、寒さに弱いこの木を、あえてこの地に植えたことについては、開山時の成賢(じょうけん)という僧が、伊豆方面からこられた方であり、成賢自身にとって見なれた樹木であったのではないかと推測されているが、まだその確証は得られていない。

しかし、このラカンマキは、宝蔵寺境内の観音堂にある馬頭観音の守り木として語り伝えられており、同寺の創建時に植栽されたものであるかも知れないということは、次のことから伺える。すなわち「新編武蔵風土記稿」によると、宝蔵寺の開山は成賢といい、嘉歴2年(1327年)に寂すとあること。また同寺境内には、昭和55年に、市の文化財(考古資料)に指定されている、観応2年(1351年)、延文5年(1360年)の板石塔婆があること。これらの年代を勘案すると、ラカンマキ、板石塔婆ともに600年余りを経ていることが考えられるわけである。

移植工程

昭和56年3月に、あらかじめ簡単な根回しをしてあったラカンマキを、昭和56年7月4日から6日にかけて移植したものである。

4日、5日にかけて、ショベルカーで半径5mぐらいの大きさに、幹の回りを掘り、根の底の方は、作業員がスコップで丸く掘り下げ、根の回りの土が崩れ落ちないようにコモとナワを巻いて、根鉢をつくり、つり上げられる段階までに準備した。ちなみに根鉢の大きさは、半径4.5m、高さ1.6m、重量にして27~28トンであった。

そして6日に移動したわけである。幹の内部に

空洞ができているため、幹が割れないように根部にワイヤーロープをかけ、立ち姿のまま、45トンのクレーン車でつり上げ、50m離れた移植地までソロソロりと運んだ。途中、3回おろし、その間にクレーン車を移動させながら、慎重に、慎重を期して動かした。

30トン近くもある巨木だけに、ワイヤーロープが巻き上げられるたびに、クレーン車の車体が浮き上がり、根部にワイヤーロープが食い込み、ミシミシときしむ音がして、見守る人達をはらはらさせた。

午後1時につり上げ始め、延々4時間にわたる作業で、終わったのは、5時頃である。なお、この移植にかかわった作業員は、13人であった。

根をかなり切ったので、移植後は枝もたくさん下ろさなければ、根づくのが難かしいわけであるが、樹形を損ねてしまうので、不用枝のみの枝下ろしを行った程度である。

移植後1年間は、頂上部に設けたスプリンクラーでの幹や葉からの水分の補給、アミノ酸を含む栄養剤の注入、更には病害虫駆除などの管理を行い、枯死から守ることにしている。

この移植に要した費用は、約600万円であったが、東北・上越新幹線工事を原因とするため、全額を国鉄が負担した。今後も維持管理のため、2年間については、一定額の予算措置がとられることになっている。

移植にかかる問題点等

この移植を請け負ったのは、ケヤキの大木移植などで実績のある松戸市の斉藤造園（代表者：斉藤崇成さん）である。「あと2年間は予断を許さないが、今のところ七分どおり大丈夫だと思っている」と、やや控え目に語る斉藤さんだが、その口調には、ちょっぴり自信がのぞいている。

また感想も交えて、次のように熱っぽく語ってくれた。「由緒ある木なので、命がけて守りたかった。だから、自分がラカンマキのつもりになって、根一本切るにしても考えに考えたつもり。それから、私は損得を度外視して、孫子の代まで誇

れる仕事をしたかったから、この移植を引き受けた」と。

更に斉藤さんは、移植先が50mしか離れていない場所であり、土壌条件等がほとんど同じであったことが救いであったとしながらも、困難だった点として、次のことをあげている。

①「ぼく」（幹が太く梢端が切られ、枝葉の少ない樹木又は幹が一部空洞となっているような樹木のこと）なので、乾燥と高温には必要以上に気をつかわねばならなかったこと。

②4、5月頃の移植が望ましかったが、新幹線工事スケジュールとの関係で、夏場の移植となってしまったこと。

③宝蔵寺の大部分が移転を余儀なくされたが、種々の理由から配置計画がなかなか定まらず、ラカンマキの移植先を決めるのに、かなりの時間を要し、遅れを増したこと。

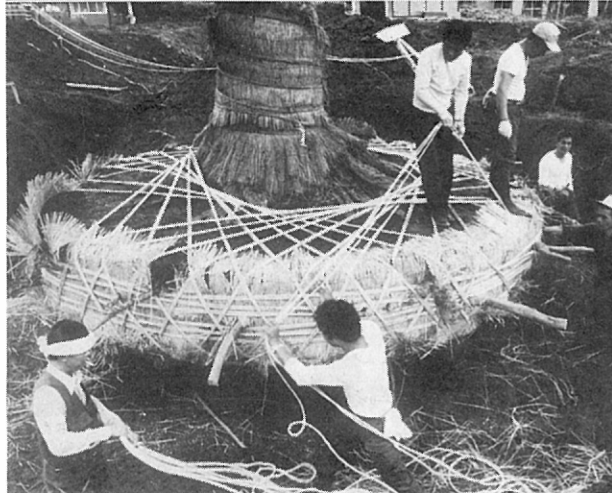
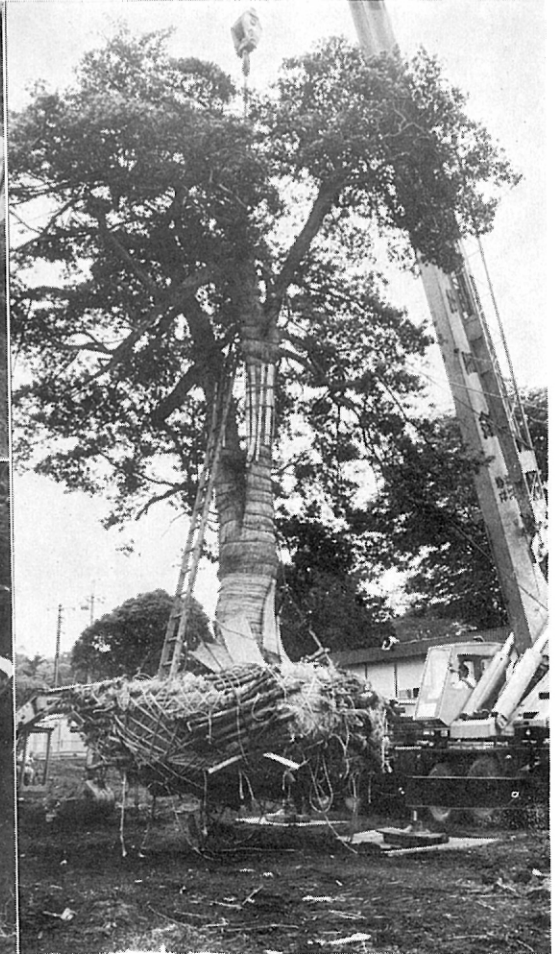
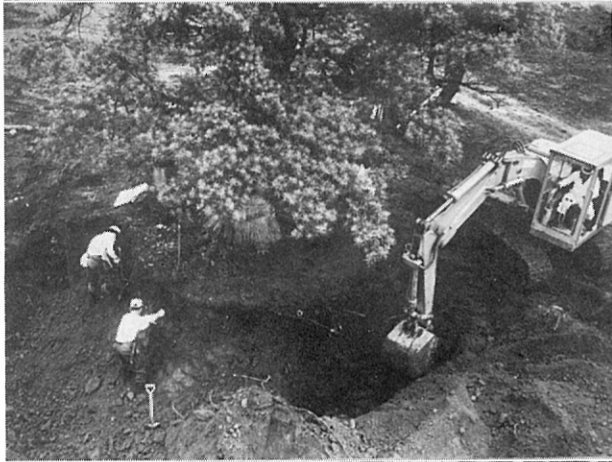
おわりに

移植後2年間は、なお予断を許さないわけであるが、携わった多くの方々の熱意、地域との歴史的なかわりを思うと、600年の長きにわたって、上尾を見つめ続けてきたこのラカンマキが、早くこの地に活着して、これからも末永く上屋市の、いや埼玉県全体の未来を見守り続けて欲しいと願わずにはいられないのである。

（口絵写真をご参照下さい）



上尾市宝蔵寺のラカンマキの移植



写真説明、左上から①移植前のラカンマキ、②幹の回りをショベルカーとスコップで大きめに掘っている様子、③コモとナワで巻いた根鉢、④根鉢にロープが食い込んでいる状況、⑤クレーン車でつりあげて移動中、次ページは移植後のラカンマキ（本文52頁参照）



ラカンマキの移植完了。東北・上越新幹線ルートにかかるため移植されたこのラカンマキ（推定樹令500～600年）が上尾市のシンボルとして生きつづけてほしいものだ。このラカンマキは県内屈指の大木、その美しい樹形は市民に愛されていたもの。（本文52頁参照）